
IS～雷鳴がなく頃に～

雨宮木乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS（雷鳴がなく頃に）

【Nコード】

N4697U

【作者名】

雨宮木乃

【あらすじ】

女性にしか反応しない兵器「インヒユニット・ストラトス」（IS）を何故か扱える夜風春輝。そのためかほぼ強制的にIS学園に入学する事になった。クラスメートは、織斑一夏を除けば全員が女子。本作オリジナルの雨須妓秋波を加え春輝争奪戦も激しさを増していく？原作キャラも色々と大活躍のドタバタラブコメディ？

プロローグ：a

「秋波！秋波！死ぬな～！諦めるな！まだ助かる！」

「起きろ！後勝手に僕を殺すな！バカ！どんな夢見てんだ？この中二病野郎！」

ドイツベルリンにあるとある家でISを動かせる珍しい少年、夜風よなぎ春輝はるきと雨須妓秋波あますぎあきはのいつも？の朝の光景である。

「起きた？間抜けの春輝！速くIS学園でいる日用品を買いに行くよ！」

強いて言うなら雨須妓秋波は男勝りの女の子である。

そして今日は、IS学園に入学するために買い物をしに行くために春輝を起こしていた、毒舌で。

「後少しい。私は、偉大なる王であるぞ！もう少し寝させて～！」
夜風春輝は、極度の中二病である。どこまで本気なのかはわからない。

「過去の王は、『私』なんて使わないと思うけど？」
勝ち誇ったように笑う遼。

「わかった！起きるから！もうこの役するの無理！やめていい？」
中二病は演じているだけだった。

「なら僕の勝ちだね？この間抜け！あは！この役楽しい！」

「頼むから、もう止めて！」

「えっ！僕もう何も考えてないよ？てか僕に文句言うな、クソムシ！」

どうやらはまったようだ。ついでに元にもでれないようだ。

「よくもまあ下らないゲームを考え付くものだな。馬鹿者達！」

「「お、織斑教官！」」

2人は慌てて立ち敬礼をする。

彼らがISを使う以外にかわった所があるとしたら、2人ともドイ

ツ軍人で何故か両方同じ部隊の隊長である。因みに階級は大尉。

「いいから速く支度をしろ。私は、おまえ達と違って忙しいのだ」

「了解！」

再び敬礼する春輝と秋波。それを見て織斑教官こと織斑千冬は頭を押さえるのであった。

プロローグ b

ここはドイツベルリンにある春輝と秋波の家。今日はIS学園入学式の一週間前の朝、2人が家を離れる日だった。

「バカ春輝！起きろ！今何時だと思ってるんだ！」

春輝は、家の事のほとんどを任されているが、朝食だけは秋波が作っている。理由は春輝が朝起きれないからである。

そして今日は朝の始発の飛行機で日本に向かう予定だったが、もう残り30分しかない。

「後1時間待つて」

「アホ！後30分もないんだぞ！1時間も待てるか！」

「へへ。……。えっ!？」

ようやく事態のやばさに気づいたのか、春輝は飛び起きる。

「なんでもっと速く起こしてくれないんだよ？」

「僕自身さつき起きたばかりなんだよ！うう、飲みすぎた」

秋波は頭をぺちぺち叩きながら水を飲み始めた。

「そうだったね。昨日はやりすぎた。これから3年もお酒を飲めないと思うと、ついもう一杯いきたくなったんだよ」

起きた春輝も水を飲み始めた？臭いはお酒のような気がするのは……

「バカ春輝っ！そうやってウイスキー飲むな！しかもロック!？」
気のせいではなかった。

「秋波！それより飛行機は？」 「僕が起きたときにはすぎてた！」

「そうなんだ！やっぱりそうか」

「春輝、どうする？織斑教官に殺されるかもよ？」

「ラウラに軍の飛行機用意させてる。そろそろ迎えが来てもいい頃なんだけどな？」

こんこん

玄関のノックになる。

「はーい！少し待ってください！」

秋波が玄関に向かう。その間に春輝は着替えを済ませ、荷物の確認を済ます。

「あれ？ノア？ラウラって春輝から聞いてるけど？」

玄関で待っていたのは、春輝と秋波がいる部隊の隊員の1人ノーツ・スカイフェリア通称ノア。何でも乗り物を乗りこなせるので、春輝が引き抜いてきたエリートでもある。

「ラウラ副隊長からの任務で、夜風、雨須妓両隊長を迎えに行って第六飛行訓練所にお連れしろと言われましたので、こちらに来させていただきました」

ノアは緊張しているのか焦点が定まっていない。

「そうなのか？少し待ってて。春輝と荷物とってくる」

秋波が家に戻ろうとしたとき

「秋波隊長！待って下さい。私がやります！やらせて下さい！」

妙にテンパって声までうわずって赤面するノア。

「ひゃあ！ど、どうしたの？」秋波まで声をうわずらせる。

「秋波隊長。もう一回行って下さい！」

「な、何を？」

「「ひゃあ！」って言って下さいお願いします。皆にも聞かせたいです！」

「な、何で僕が言わないといけないんだよ！それより速く春輝呼んできてよ！」

秋波はノアが乗ってきた車に、逃げるように乗り込む。

「はーい！秋波隊長」

ノアは秋波と春輝の家に入っていく。

（危ない、危ない！織斑教官以外にバレる訳にはいかないのに、もう少し気おつけよ）

◇

「春輝隊長！迎えにきましたよ！」

（ここが隊長達の部屋。ラウラ副隊長に無理言って変わってもらって良かったな！）

しばらく探していたノアは、春輝を寝室らしき場所で見つける。

「春輝隊長！ってまだ寝てるんですか！？悪戯しちゃいますよ？」

小悪魔の笑みを浮かべるノア。そして春輝に顔を近づける。

「ノア！？隊長に何をするきだ！」

「ラウラ副隊長！？な、何でここにいるんですか？ひ、飛行機は？」

「ああハハハ！引かかった！僕だよ僕。雨須妓秋波だよ！」

ラウラの顔が破れて、中から秋波の顔が出てくる。

「何で隊長が、ラウラ副隊長の顔を……」

「変装だけど？」

それから会話が止まり何分か経ち。

「お二人さん！速くいこ！」

春輝が起きて声をかける。

「お前のせいでこうなったんだ！」

そして2人は、ノアの車で第六飛行訓練所に向かうのであった。

◇

「ノア！遅かったな！」

飛行訓練所ではラウラが仁王立ちして待っていた。

「ふ、副隊長……」

「何か弁解でもあるのか？」

ラウラとノアは、春輝と秋波から離れた場所で話していた。

「まあまあ！それより速く行こうよ！」

「バカ！お前のせいでノアが怒られているんだろうが！」

「そうなの？」

「そうだバカ！」

それからしばらくして軍の飛行機で日本に向かう春輝と秋波であった。

プロローグ b (後書き)

さてさて、いかがでしたか。

次回からは本人にあとがきを書かせたいと思っているんですよ。他人の作品のあとがきは難しいですからね。他

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4697u/>

IS～雷鳴がなく頃に～

2011年10月9日00時56分発行